



手花部(てけぶ)※方言名：ティーブ

坂下川と集落下の奄美市指定文化財のマングローブが印象的な手花部集落。集落の墓地の先にある津代港から赤木名へと抜ける道は「津代の古道」と呼ばれ、交易港であった津代と赤木名グスクを結んだと言われています。集落前には干潟が広がっており、外海が荒れても湾が内側に広がっているため静かな海辺になっています。



津代の古戦場跡と古道

ここ津代の地は、慶長14(1609)年に薩摩が奄美大島に侵攻してきた時の上陸地であり、戦闘があったといわれている。県道ができるまでは、津代港と赤木名の間はこの古道を通して行き来していた。歴史を感じる峠越えの古道は、古墓や山城跡、水田跡を散策しながら約30分で通ることができるが、ハブに注意が必要。



津代港

手花部湾に沿ってヘレ(平井)から津代に行くと、砂浜が北側に湾入し、深みになっているところが津代港であったといわれている。藩政時代には黒糖の積出港として栄えていたとされる。手花部には薩摩や琉球へ往來する季節の風を待つ帆船やマーラン船の乗組員が待機していたとされている。



アナバリトフル

津代港の対面に地元老人クラブが建てたアナバリトフルの案内板がある。小道沿いにロープを伝って登ると、山の中腹に西側(海側)に開口した横穴がある。地元でアナバリトフルと呼んでいる墓地である。開口部は高さ約60cmぐらいで小さいが、中はフラスコ状に広がっている。



手花部墓地

南西の段々畑風の斜面に墓石が整然と並ぶ手花部墓地には、薩摩の影響を受けた伊家の墓地をはじめ、山川石製の五輪塔の墓が並んでいる。他のシマの墓地と違い、整然と南西斜面に並ぶ墓地は仏教の影響を強く受けた感じがする。手花部の墓地は奄美市指定文化財(歴史)になっている。



北限のマングローブ

ヘレゴウ(平井川)から南側はアガレと呼ばれ、メヒルギ等が群生する奄美大島北限の干潟である。干潟は貴重な5種類のシオマネキとハゼ、鳥類などの生息地でもある。メヒルギ等は陸からの泥や土、栄養分をたくさん含んだ水を受け止めるフィルター役も果たしている。



手花部カトリック教会

メヒルギ等が群生する干潟の南側から少し高くなった所に、アガレ、ハウジョウ、金久、小勝と集落がある。教会は集落北側のアガレにあり、昭和23(1948)年頃から布教活動が行われている。大島地区内でも最も可愛い小さい教会の1つであると思われる。



マジャンキリ

手花部地区の国道58号線から約100m沖合には長さ約100m、高さ約60cm、幅1.5mの弧状をなす潮垣がある。干潮時に垣の中に取り残された魚を獲るためのもので、地元では「カキ」またはマジャンキリ、ウシュガキ(潮垣)とも言う。同様の垣は、九州西海岸では「ナーガキ」と呼ばれ、広くフィリピンあたりでも同様の漁法が行われている。



グスク跡

手花部集落南側には北に延びる丘上の山がある。舌状に伸びる小高い丘には水源地があり、台地一帯が畑地になっている。ここからは手花部湾が一望でき、見晴らしがいい。台地状をなす畑からは、カムイヤキと青磁等の陶磁器が表面採集されている。それらは14世紀頃の物であると考えられている。